『北と南』における「恥じ入る」暴徒と ヴィクトリア朝小説にたどる群衆表象の変遷

伊藤 正範

1　イントロダクション

飛来する小石と額を伝う一筋の血――エリザベス・ギャスケル『北と南』(1855)の中盤、それまで隔たっていたマーガレットとソーントンの距離に変化が生じるきっかけとなるのは、ソーントンの屋敷にストライキ中の労働者たちが詰めかけ、暴徒化しかける場面である。より正確には、今にも襲いかからんとする群衆から、マーガレットが自らの身を「盾」(179)にしてソーントンを守ろうとする場面と言ったらよいだろうか。投石がかすめたマーガレットの額からは一筋の血がしたたり落ち、憤ったソーントンの譴責に我に返った労働者たちは、「恥じ入り」ながらそそくさと退散していく。[1] 投げられた石はそれまでの停滞した二人の関係に良くも悪くも波紋を生じさせ、決して理解し合うことのなかったであろう中産階級の男女を、新たな関係性へと導いていくのである。と、こう言い表すと、群衆は、プロットの中心軸となる恋愛劇の進展に重要なきっかけをもたらす、テクスチュアルな道具立ての一つのように見えてくる。

しかしこの群衆とはいったい何であろうか。二人の私的なロマンスに焦点を合わせれば合わせるほど背景でぼやけていく彼らは、実は、当時の小説にとって極めて扱いの難しい公的問題の一つであった。本論は、ヴィクトリア朝小説における群衆表象の変遷を観察しながら、〈鎮圧〉される群衆から〈悔悛〉する群衆へと至る流れの中で、ギャスケルの提示する群衆がどのような位置づけにあるのかを探っていく試みである。その過程において、当時の労働運動の発展に直面したギャスケルの語りが、群衆の新たに生じてきた側面にどのように対処していったかを明らかにしていきたい。

2　狂乱の群衆――ディケンズ『バーナビー・ラッジ』とル・ボン『群衆心理』

ヴィクトリア朝小説において暴徒が描かれた先行例としてまず挙げられるのが、チャールズ・ディケンズによる『バーナビー・ラッジ』（1841）であろう。1780 年に発生したゴードン暴動に題材を取ったこの小説では、カトリック教徒差別の緩和法案に反対した暴徒がロンドンを埋め尽くし、破壊の限りを尽くす。そうした群衆を描き出すディケンズの筆致は揺るぎなく冷徹である。略奪した酒を文字どおり死ぬまで飲んだり、自らが焚きつけた業火の中で生きたまま焼かれたりし、累々と屍をさらす彼らは、一貫して無秩序で非理性的な存在として提示され、そこに読み手の共感を誘い入れる隙はない（442, 546-47）。また軍隊の力によって彼らが制圧されるという結末には、彼らの悔悛や更正へとつながる余地が何ら残されていないのである。

こうした暴徒のあり方は、後にフランスの群衆心理学者、ギュスターヴ・ル・ボン（Gustave Le Bon）が『群衆心理』（*La psychologie des foules,* 1895）において取りまとめた群衆の類型と緊密な類似を有している。「巨大な群衆は一切の理性も思考も持たず、向こう見ずな感情によって突き動かされていた」（421）とディケンズが描写するように、暴徒たちは、平時において個々の人間が持つはずの理性や判断力を失い、全体を覆う興奮状態と同調しながら、ただ短絡的な感情のみによって行動する。ル・ボンによると、群衆状態においては、「あらゆる感情や行動は感染性を持つ」といい、さらには「暗示」によって「意識的な個性」が奪い去られ、催眠状態に導かれた個人は、「脊髄の無意識的活動の奴隷」になり下がるのだという（7）。[2]

また、ル・ボンは、群衆が「自らを本能的に主導者の権威のもとに置く」（72）ため、誰がリーダーとなるかによって、その考えや行動が変転するものであると主張する。そして多くの場合、そのリーダーとは「単なる首謀者か扇動者以外の何ものでもない」のだという。実際、『バーナビー・ラッジ』の暴動において暴徒たちを扇動する役目を担うのは、タパーティット、ヒュー、デニスのようなごろつきや悪漢たちである。こうした退行的なイメージこそが『バーナビー・ラッジ』の群衆表象を席巻しているものであり、制御を外れたその力は、社会から取り除かれるべき危険な因子として現れるのである。

ちなみに、法や制度は群衆に対して無力であると主張するル・ボンの最大の関

心は、いかに自らの理論によって、「現代の立法者」が群衆の脅威に対抗できるかという点にあった（xiv-xv）。ゆえに彼は群衆心理を科学的に分析・理解することで、その力を適切な管理下に収める手立てを模索したのである。まさにこの点において、ディケンズの小説には、ル・ボンの群衆理論の基幹を形成するのと同じ危機意識が、それを半世紀以上も先取りする形で内包されているのである。

3　暴動を〈見る〉女性たち——シャーロット・ブロンテ『シャーリー』

『バーナビー・ラッジ』ほど顕在的ではないにしろ、シャーロット・ブロンテによる『シャーリー』（1849）もまた類似した群衆像を提示している。1810 年代のラッダイト運動期を舞台とするこの小説では、当時の労働者による実際の工場襲撃をなぞる形で、ロバート・ムアの織物工場が労働者の大群によって襲撃される。[3] 夜陰に乗じて工場にやってきた暴徒たちは、投石を開始しながら「叫び声」を上げ、機械化を推進する工場主への憎しみを破壊のエネルギーへと転化していく（289）。が、その勢い虚しく、ムアがあらかじめ雇い入れていた私兵たちの抵抗に遭った彼らは、何人かの死傷者をそこに残したまま退却していくのである。

ディケンズほど群衆心理に光が当てられているわけでもなく、また首謀者の悪辣さが強調されているわけでもないが、「ライオンがたてがみを振る」様に喩えられる工場主の威容が、「ハイエナの遠吠え」（289）に喩えられる群衆の叫びに立ち向かっていく構図には、現実の資本者階級と労働者階級のヒエラルキーが直截に反映されていると言ってよいだろう。そうした点で、ブロンテの群衆表象には、エリート的な立場から民衆の暴走を食い止め、適切な管理下に収めるというル・ボンの群衆観が先見的に内包されている。

そしてテクストの語りは、群衆を一見して読者の共感から隔たったところに配置する。というのもこの暴動の場面は、遠巻きながら終始ムアの無事を祈るキャロラインとシャーリーの視点から語られるからである。ジョン・プロッツ（John Plotz）の言葉を借りると、「受動性と感情的関与が共存する」この視点は、労働者の暴動を眼前にして「中産階級的な家庭性（ドメスティシティ）」を生成すると同時に、群衆の存在が公的領域において生じさせる問題に対処できるよう、単なるロマンスとは異なる想像的空間をテクスト内に創出する（168-71）。そこでは工場主ムアとラッダイト運動の暴徒とが二極的対立を形成することによって、最終的にテクストを

「公的に流通可能な」ものとしながら、同時にブロンテ流の私的要求を実現する場として存立させる（179-80）。そうした複雑なテクスト性の背後に透けて見えてくるのは、当時の群衆の「力」である。再度プロッツの言葉に依拠すると、小説は「私的な領域を防衛し」つつも、「（労働者の）代表としての群衆の潜在的な力を認め」ざるを得ないのである（172）。

しかしながら、群衆の「力」を単に物理的なものとしてしか捉えていない点において、プロッツの議論には若干の補正が必要となる。というのも、この場面における暴徒は、ディケンズが描くそれのように、単に感情の抑制を喪失し、理不尽な暴力に身を委ねただけの存在ではないからだ。ムアの工場への襲撃者たちが退却した後、その敷地内にはうつ伏せになって静かに横たわる「1 つの死体」と、「血まじりの埃にまみれてうめき苦しむ 5､6 人の負傷者」が取り残される（292）。冷徹な眼差しで、うち捨てられた死者たちを暴徒の愚行の象徴であるかのように提示する『バーナビー・ラッジ』とは異なり、『シャーリー』の語りは女性の視点を通して、この死体と負傷者に哀れみの感情を差し向ける。

> Miss Keeldar's countenance changed at this view: it was the after-taste of the battle, death and pain replacing excitement and exertion: it was the blackness the bright fire leaves when its blaze is sunk, its warmth failed, and its glow faded.
>
> "That is what I wished to prevent," she said, in a voice whose cadence betrayed the altered impulse of her heart.
>
> "But you could not prevent it; you did your best; it was in vain," said Caroline, comfortingly. "Don't grieve, Shirley."
>
> "I am sorry for those poor fellows," was the answer, while the spark in her glance dissolved to dew. (292)

「かわいそうな人たち」というシャーリーの言葉を介して前景化された女性の私的な憐憫は､暴動のクライマックスにおいて語りに差し挟まれる｢飢えて怒り狂った工員階級」（289）という描写や、物語の先行段階において使節団とともにムアを訪れたウィリアム・ファレンの「家族が貧しく飢えている」（117）という切なる訴え、さらにはムアが「生きている織工たちをまるで織機や裁断機といっ

た機械であるかのように」(62) 扱っているというキャロラインの諫言へと遡及的にリンクしながら、テクストに私的共感のフィールドを張り巡らせる。

ここに現れるのは、ディケンズの描く暴徒とは異なる、より複雑な、二面性を有する群衆のあり方である。群衆が単純な物理的暴力の行使者である限り、それはあくまでも公的領域において、警察（軍）と司法の力によって取り除くことが可能な変則（アノマリー）の一つでしかない。確かに暴徒は、知的障害を抱えるバーナビーを抱き込むことによって、あるいはドリーやエマを拐かすことによって、ヴィクトリア朝の家庭的な問題へと干渉していくかもしれない。しかし、ディケンズの語りはその問題を私的領域ではなく、あくまでも暴徒と軍隊が対峙する公的領域において解決し、同時にその解決を齟齬なく私的領域の問題解決と重ね合わせていく。扇動者たちの処刑場面が冷ややかなアイロニーや嘲笑とともに提示される一方、すんでのところで処刑を免れたバーナビーは愛する母親のもとへと戻り、囚われていたドリーとエマは、彼女たちを救い出したジョーとエドワードとそれぞれ結婚するのである。他方、『シャーリー』においては、公的領域において明白な正当性を有するものが、私的領域において必ずしもそうであるとは限らない。暴徒の鎮圧という社会的正義はむしろ家庭的な安らぎや幸福に逆行するものであることが、女性主人公たちの視点を介して示されるのである。

ディケンズと異なり、群衆の描写においてこうした二面性が生じるのはなぜであろうか。一つの大きな違いは、ブロンテの群衆がラッダイト運動のそれだという点である。『バーナビー・ラッジ』の宗教的差別に突き動かされた利己的な暴徒とは異なり、『シャーリー』の工場襲撃者の背後には、困窮する家族を養い、家庭生活を守るという新しい大義がある。ジェントルマン階層の家庭的（ドメスティック）なモラルと矛盾することなくならび立つその大義は、シャーリーやキャロラインの視点を通してテクストの語りに埋め込まれながら、群衆の政治性に、それと対立する私的な関心を混ぜ合わせていく。フィールドヘッド屋敷を中心とした古い封建的コミュニティーにラッダイト運動の波が押し寄せてくる時代において、群衆表象はもはや従来のように一枚岩的なものであり続けることはできない。チャーティスト運動に盛り上がる 1840 年代後半に生み出されたブロンテの語りは、回顧的（レトロスペクティヴ）な洞察をもって、そうした変化の兆しを鋭敏に捉えるのである。

しかしながら、ブロンテの工場襲撃者たちは、ギャスケルのそれのように「恥

じ入る」群衆ではない。最終的に体制と秩序の側に包摂されるという点ではディケンズ、ブロンテ、ギャスケルの群衆は同様であるが、ギャスケルが先行者たちと異なるのは、暴動がまさに勃発しようとする間際において〈悔悛〉し、暴走しかけた激情を自ら鎮める群衆を登場させているという点である。具体的な『北と南』の分析に入る前に、ここではヴィクトリア朝末期に現れたもう一例の〈悔悛〉する群衆を、急ぎ足で見てみたい。

4　暴徒の〈悔悛〉——コンラッド『ナーシサス号の黒人』

ロンドンへと向かう商船を舞台としたコンラッド『ナーシサス号の黒人』（1897）において、船員たちは度重なる嵐の下での過酷な労働に不満を募らせながら、船長アリストゥーンが黒人船員ウェイトの病を嘘と断定したことをきっかけに怒りを爆発させる。船員ドンキンの「ちくしょう、俺たちは機械だってのか」という叫びが響き渡る船上で、「群衆［船員たち］は一団となって［船長たちのいる］船尾に向けて短く駆けて」（“The crowd took a short run aft in a body”）いく（121-23）。[4] しかし、この騒乱はすんでのところで暴動に至ることなく収束する。船具のビレーピンを船長たちに向かって投げつけ、続いて第二弾を投擲しようとしているドンキンを、他の船員が「俺たちゃあ、そんな輩じゃねえんだ」（“We ain’t that kind!”）と窘めながら、平手打ちで阻止するからである（123）。翌朝の点呼時、やにわにビレーピンをポケットから取り出し、怒りの眼差しを投げかけるアリストゥーンを前に、船員たちは落ち着かない様子を見せる。

> The crowd stirred uneasily. They looked away from the piece of iron, they appeared shy, they were embarrassed and shocked as though it had been something horrid, scandalous, or indelicate, that in common decency should not have been flourished like this in broad daylight. (135)

彼らを支配するのは、一時的な激情に身を委ね、船乗りとしての本分を忘れてしまった自分たちに対する戸惑いと羞恥の感情だ。「団結心」（“solidarity”）をキーワードに語りが描出する船内のコミュニティーは、商船の運航という一つの揺るぎない目的のもとに集まった、国籍も年齢もバラバラの船員たちからなる。目的地到

達のために必要なものは船長命令の遵守と自己犠牲的な献身であり、権利を声高に叫ぶことや、労働を忌避することではない。そうした一時的な逸脱を自ら抑制し、矯正する力をナーシサス号の群衆は有しているのだ。より正確に言うならば、自ら航海士や船長として船乗りたちの上に立った経験を持つコンラッドは、自身の虚構世界と語りをそのように創出するのである。

労働運動がますます勢いを増す19世紀末、労働者たちは自分たちの〈声〉の正当性を度重なるデモンストレーションや、それを報じる新聞などを通して確立していった。1889年に起こったグレート・ドック・ストライキ（Great Dock Strike）は、ロンドンの港湾全域を巻き込みながら空前の規模へと発展し、最終的に労働者側の要求がほぼ受け入れられるという完全勝利で幕を閉じる（Lovell 93-94, 102）。この出来事の注目すべき点は、労働者の数の力が大きな体制を動かしたという事実だけにあるのではない。当時の新聞や定期刊行物に当たってみると、リベラル派はもちろんのこと、保守派の媒体までもが概して労働者たちに共感的な記事を掲載していたことがわかる。[5] デモ隊は決して秩序や統制を失うことなく整然と行動し、そうした様子が新聞報道を介して大衆の共感を呼び、好意的なパブリシティーを獲得していったのである（Lovell 104, 110）。

そのように現実世界における労働者の〈声〉が強まりつつある時代、小説も群衆を単純な悪役として登場させ続けることはできない。もはや彼らを力で平伏すれば大団円が訪れる時代ではないのである。だからこそコンラッドは、内部からの異なる〈声〉の発生を通して自らを自発的にコントロールする群衆を創出する。物語の集結部で語り手――彼もまた名のない船員の一人である――が「君たちはよい連中（クラウド）だった」（“You were a good crowd,” 173）と見送るナーシサス号の船員たちは、集団的モラルを一つの結節点とし、内的な動機づけによって進んで体制の管理下に収まろうとする、〈悔悛〉する群衆なのである。

さて、ヴィクトリア朝初期から末期に至るまで、労働運動の発展に伴って小説における群衆表象がどのように変遷していくかをひと息に眺めてきたが、その流れの中で、ギャスケルの『北と南』はどのような語りを提示しているのだろうか。そこには、群衆と同じく変化のさなかにあった産業化時代の女性が、その「傷つく身体」をもって大きく関与してくる。

5　群衆の鎮圧とジェンダー――ギャスケル『北と南』

本論の冒頭で手短に言及した『北と南』におけるストライキの場面であるが、より注意深く見てみると、その語りに、ブロンテによる暴動の描写と酷似した要素が混じり込んでいるのがわかる。マーガレットが最初、ソーントン邸に押し寄せた労働者の群れを「とどろき渡る怒りのざわめき」としか認識できないのは、『シャーリー』における暴動が女性主人公たちの知覚に「叫び」(177) としてしか届かないのとよく似ている。また、群衆とソーントンのにらみ合いを階上の窓から眺める彼女の視点はあくまでも対立の外部に置かれ、その視野は制限されている。そして、そうしたマーガレットの視点を通して、群衆の背後にいる「飢えた子供たち」が見えてくることにより、語りには、労働者の窮状に対する憐憫が内部化されていく。上のくだりで言及されるバウチャーに加え、失業中のヒギンズや綿肺症を患う娘のベッシーとかねてより親交を結び、その苦しみを目の当たりにしてきたマーガレットにとって、群衆は、社会秩序の侵犯に対する一方的な誹りだけを差し向ける対象ではないのである。公的に喚起されるべき群衆への非難は、それと逆行する私的な共感と共存し、語りにおける群衆は『シャーリー』と同様の複層性をもって現れてくる。

しかしこの直後、ギャスケルのテクストはブロンテの先例を外れ、群衆と女性との新しい関係に踏み入っていく。男たちが木靴を手にし、今にも投げつけんばかりの様子にあるのを認めると、マーガレットはとっさに階下へと走り降り、ドアを開ける。それは女性を群衆から隔離していた外枠が取り払われた瞬間とも言える。彼女がデモ隊とソーントンとの間に割って入ったとき、女性はもはや外部から労働者と工場主との対立を眺めるだけの視点ではなくなる。そして、彼女の参与は単に身体的な現前（プレゼンス）にとどまらない。続く場面において、彼女は群衆による暴力の直接的な対象となるのだ。

> A sharp pebble flew by her, grazing forehead and cheek, and drawing a blinding sheet of light before her eyes. She lay like one dead on Mr. Thornton's shoulder. Then he unfolded his arms, and held her encircled in one for an instant:
>
> 'You do well!' said he. 'You come to oust the innocent stranger. You fall—you hundreds—on one man; and when a woman comes before you, to ask you for

> your own sakes to be reasonable creatures, your cowardly wrath falls upon her! You do well!' They were silent while he spoke. They were watching, open-eyed and open-mouthed, the thread of dark-red blood which wakened them up from their trance of passion. Those nearest the gate stole out ashamed; there was a movement through all the crowd—a retreating movement. (179)

ここで興味深いことに気づかないだろうか。マーガレットの血が、群衆の暴力的衝動と無分別さを象徴するかのように流れ落ちる一方で、女性の参入と負傷という——ある意味『バーナビー・ラッジ』や『シャーリー』を上回るほどのショッキングな——出来事が、群衆の脅威をよりいっそう鮮明化するわけではないのだ。むしろ語りは、ソーントンの正義が勢いを回復し、群衆の怒りがその激しさを失っていく様子をまざまざと描き出す。マーガレットの額からしたたる「赤黒い血の筋」を目にした彼らは「激情の陶酔」から醒め、「恥じ入り」ながらそそくさと退却していくのである。

ここでの女性の関与は、労働者の群衆と中産階級の個人との関係をそれまでと一変させる。単純にデモ隊とソーントンの優劣が逆転するということを言っているのではない。この物語における対立だけでなく、『シャーリー』が提示する対立においても、群衆と資本家の関係は、女性が不在のおしなべて同性的なものであった。[6] だが、群衆の暴力の前に女性が立ちはだかった瞬間、その関係は女性を襲撃する男性と、さらにはその女性を守る男性という異性間のジェンダー関係へと置き換わる。結果としてそこに現れるのは、従来のル・ボン的な群衆——理性を喪失し、怒りの感情によって突き動かされた社会的害悪としての暴徒——とは異なる、より人間的な感情やモラルによって支配された、〈悔悛〉する群衆である。ある意味、コンラッドの群衆を先取りするものとも言えるが、ギャスケルにおいてはそうした変化のプロセスの中で、マーガレットという女性の参与が大きな役割を果たしていることを忘れてはならない。

この場面におけるジェンダー力学について論じる先行研究は数多い。だが、女性が公的な場に姿を現すことと、テクストの内包する群衆への政治的関心とがどのような関わりを有しているか、ということを探っている例は少ない。その中から本論が注目するのは、ジェシー・リーダー（Jessie Reeder）による、「壊れた女

性の身体」に関する議論である。リーダーは、『北と南』における女性の身体が、暴力などによる侵害を受けやすい、すなわち「浸透性のある」(“permeable” な)ものとして提示されることによって、一定の政治的役割を果たしていると主張する。特に擾乱の場面におけるマーガレットの傷ついた身体は、実にタイミングよく「政治的暴力を追い散らすことに成功する」のだという。

さらに本論を進めていくにあたって、このリーダーの議論には若干の補足修正を加える必要があるだろう。というのも、マーガレットの身体が挿入されている空間が、あるいはそれが直面する暴力が揺らぎなく「政治的な」ものなのかどうかには、疑問の余地があるからである。確かに彼女がドアを開けて飛び出していった先は、労働者と工場主が対峙する政治的空間かもしれない。しかし彼女がそこに立ち入った瞬間、あるいはより明確には傷つき血を流した瞬間、その場を支配していたはずの政治性は雲散し、両者の関係は別のものへと置き換えられるのだ。そこでの労働者は、工場主に抗議する貧窮者たちというよりはむしろ、女性に暴力を差し向ける男性的存在として現れる。そして負傷したマーガレットを抱きかかえ、彼らの行為を声高に非難するソーントンは、彼女をその暴力から守る騎士とでも言ったらよいだろうか。ほんの一瞬前までマーガレットに取って代わられていた「盾」としての役割はすでにソーントンの手に戻り、その転倒を引き起こしたマーガレットの向こう見ずな感情はソーントンの至極正当な憤怒へと回収され、そこにはいつのまにかヴィクトリア朝の家庭的(ドメスティック)なジェンダー規範が支配する世界が広がっている。その世界では、労働者たちはもはや資本主義の哀れな犠牲者ではない。女性の神聖なる身体を傷つけた彼らは、その身体と不可分に結びついた私的領域の侵害者と化し、自らの内なる良心が生成する「恥」の意識によって苛まれるのだ。[7] 結果として群衆の暴力は解消されるものの、この時点でもはやそれは「政治的な」ものではなくなっているのである。

このように『シャーリー』で実現しなかった暴動現場への女性の介入は、労働と資本の闘争が進行する公的空間を、ジェンダーにまつわるプロットが進行する私的空間へとすり替え、労働運動の莫大なエネルギーを別次元の〈悔悛〉へと回収してしまう。結果的に群衆のコントロールという政治的な目的は成就するかもしれないが、それはディケンズやブロンテのように対抗的な武力——群衆の暴力と同種の物理的な力——をもって達成されるのでも、またコンラッドの「団

結心」のように群衆そのものに内部化されたモラルをもって達成されるのでもない。デモ鎮圧のために召喚された軍隊が到着するより早く、政治的軋轢の場に挿入された女性のプライベートな身体によって対立の軸はずらされ、結果的に非政治的な次元において問題は解決に導かれるのだ。

『北と南』が執筆された 1855 年は、ヴィクトリア朝のイギリスで猛威を振るったチャーティスト運動の末期であった。人民憲章という旗印のもとに集った工業地帯の労働者たちを中心に、全国的な社会運動として拡大していったチャーティズムは、その政治性の背後に常に家庭的（ドメスティック）な関心を置くものであったと言える。空腹の赤ん坊が母親の乳房に吸い付いて離れないなどの訴えは尽きることなく、指導者の一人が、普通選挙の実現は「我々の国に自由をもたらし、家に幸福をもたらす」と主張したように、政治と家庭は不可分のものだった（Thompson 181-83, 185）。夫ウィリアムとともに多数の慈善活動に携わってきたギャスケルが、『北と南』におけるヒギンズ一家やバウチャー一家の描写に、そうした現実の貧苦に対する共感を織り交ぜていることはあまりに自明だろう。

しかし同時に、歴史的に見てチャーティズムが成功した運動だと言いがたいのも確かである。期間中、ストライキや暴動は頻発したが、多くが軍隊の投入によって鎮圧され、指導者たちの逮捕も多数に上った。1842 年に起こった「プラグ暴動」では結果的に 1,500 人の逮捕者を出し、主導者は海外逃亡を余儀なくされた（Morton and Tate 92-94）。『北と南』の執筆中、1853 年から 54 年にかけてランカシャー州プレストンで織工たちが賃上げを求めて起こしたストライキにおいても、8 ヶ月にわたる闘争は何の成果ももたらすことなく終わっている（Morton and Tate 103）。そうした実例が示すように、ギャスケルの時代において群衆とは本質的に不毛なものであった。特に抑制を外れたその暴力的な衝動は――『シャーリー』において描かれるラッダイト運動の時期から変わらず――社会的に到底容認し得ないものだったのである。

『北と南』の群衆表象に反映されているのは、こうした当時の群衆に対して小説が抱えていたジレンマであると言えよう。窮状を訴える労働者たちの〈声〉が、もはや直接的な力でねじ伏せることのできない――もしねじ伏せてしまうと今度はテクストに内在する共感が暴発し、抑制不能になってしまいかねない――ほどの切迫性を帯びつつある中で、群衆そのものはなお望ましくないもの、取り

除くべき害悪であり続けたのである。

コンラッドの時代が異なるのは、1890 年代において労働運動はすでに自律的な統制を有し、それを公にも認められていたという点である。コンラッドの描き出す〈悔悛〉する群衆は、そうした秩序やモラルの内部化をすでに達成した時代の産物であると言えよう。他方、チャーティスト運動の隆盛と破綻とを経験したギャスケルの時代において、群衆は確かな共感の対象でありながら、なお大きなリスクを孕むものであった。そうした群衆の二面性に直面したギャスケルの語りは、焦点をジェンダーの問題へとすり替えることによって擬似的に問題解決を達成する。このように、ヴィクトリア朝小説による群衆との対峙の歴史において、『北と南』は傷つく女性の身体と「恥じ入る」群衆の表象をもって、一つのユニークな語りを形成するのである。

注

1　以降、本論文における原文からの和訳はすべて執筆者による。

2　以降の引用は英語訳 *The Crowd: A Study of the Popular Mind*（1896）による。

3　この工場襲撃が 1812 年にローフォールズで実際に起こったラッダイト暴動の新聞報道に基づいていることについては、Rosengarten 594 参照。

4　この小説では冒頭から船員たちがしばしば “crowd” という語で言い表されている。日本語の「仲間」や「連中」——*OED* によれば “set” や “lot” と同義の口語的用法（“crowd, n.3”）——に近いケースが多いが、船という閉鎖空間で平船員たちが一定の集団心理のもとに置かれている様子を表していることもあり、特にこの場面ではそうした意味での「群衆」にかなり近接していると言える。

5　例えば、8 月 26 日付 *Times* の社説は、ドック労働者たちの主張の正当性を認めながら、「主要な点において世間の共感が彼らとともにある」と述べている（“The Vast Shipping Trade of the Port of London”）。

6　当時の現実の組合活動において女性が闘争の前面に出てくることは非常に稀であり、多くは家庭にとどまりながら後方支援的な役割に徹していたとされる。プレストン・ストライキにおけるそうした事例については Dutton and King 51-52 参照。

7　女性の身体の神聖性と家庭領域の神聖性との結びつきについては Reeder 5 参照。

引用文献

"Crowd, n.3." *Oxford English Dictionary*, www.oed.com/view/Entry/45034.

"The Vast Shipping Trade of the Port of London." *Times*, 26 Aug 1889, p. 7.

Brontë, Charlotte. *Shirley*. Edited by Herbert Rosengarten and Margaret Smith, Oxford UP, 2008.

Conrad, Joseph. *The Nigger of the "Narcissus."* Edited by Jacques Berthoud, Oxford UP, 1984.

Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. Edited by Clive Hurst, Oxford UP, 2008.

Dutton, H. I. and J. E. King. *Ten Per Cent and No Surrender: The Preston Strike 1853-1854*. Cambridge UP, 1981.

Gaskell, Elizabeth. *North and South*. Edited by Angus Easson, Oxford UP, 2008.

Le Bon, Gustave. *The Crowd: A Study of the Popular Mind*. Dover, 2002.

Lovell, John. *Stevedores and Dockers: A Study of Trade Unionism in the Port of London, 1870-1914*. Augustus M. Kelley, 1969.

Morton, A. L. and George Tate. *The British Labour Movement, 1770-1920*. Lawrence and Wishart, 1956.

Plotz, John. *The Crowd: British Literature and Public Politics*. U of California P, 2000.

Reeder, Jessie. "Broken Bodies, Permeable Subjects: Rethinking Victorian Women's 'Agency' in Gaskell's *North and South*." *Nineteenth-Century Gender Studies*, vol. 9, no. 3, 2013, www.ncgsjournal.com/issue93/reeder.htm.

Rosengarten, Herbert J. "Charlotte Brontë's *Shirley* and the *Leeds Mercury*." *Studies in English Literature*, vol. 16, no. 4, 1976, pp. 591-600.

Thompson, Dorothy. *The Early Chartists*. Palgrave Macmillan, 1971.

Abstract

The Rioters Growing "Ashamed" in *North and South* and the Representation of Crowds in Victorian Novels

Masanori ITO

This paper first pays attention to the thwarted riot in *North and South*, in which striking mill workers incidentally injure Margaret, and retreat from the scene "ashamed" of their un-gentlemanly violence. While this crowd behaviour disturbs the relationship between Margaret and Thornton, inert to this point, and so provides a momentous cue for the development of the novel's romance plot, the political significance that has so far been incidental to it curiously withdraws into the background. Notwithstanding, the novel is at this point dealing with a newly emergent aspect of crowds consequent upon the development of the then contemporary labour movements.

I will attempt to re-evaluate the narrative of *North and South* in the context of the Victorian experience of crowds, by comparing the novel's near-riot scene with the representation of crowds from other Victorian novels: Dickens's *Barnaby Rudge*, in which rioters are led by incorrigible types of scoundrel and eventually suppressed by force; Brontë's *Shirley*, in which the use of female viewpoints covertly inserts domestic interest into the riot scene; and Conrad's *The Nigger of the 'Narcissus'*, in which an insurgent crowd autonomously quells its deviatory passion by means of internalized morality and conscience.

In the course of my argument, it will be discovered that the augmented voice of the real-world working class intrudes into the fictional world, gradually splitting its narrative between a rising urgency in the domestic realm towards sympathy for urban destitution, and the traditional requirement to remove the threat of crowds from the public realm. I will then conclude by discussing how the narrative of *North and South* resolves its political conflict by inserting a female body into the public space, and thus replaces the exuberant energy of the crowd with a sense of shame deriving from Victorian domestic norms of gender.